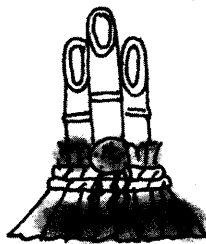


# 特集

## 子どもと新年 時の結び目といふこと

— 情報技術時代の  
子どもの成長について —

鈴木禎宏



かつて、正月二日といえは一年で最も退屈な日でした。冬休みが始まると、子どもたちはクリスマス・イブやクリスマスを控え、何とも言えぬ落ちつききなさを覚えたものです。この感じは年末に向かつて高まってゆき、ある種の高揚感と共に大みそかの歌番組、元旦のお雑煮とお節料理、お年玉、年賀状、初詣を迎えました。

ところが、翌日の二日というのは三が日でありな

がら、何とも退屈な日でした。年賀状は来ませんし、テレビにも倦怠感を覚えるころです。外へ出てもお店はどこも閉まったままで、当分開く気配がありません。大人たちは年末年始の疲れが出て、家で休みがちです。皆それぞれの家庭の事情があるので、友達と遊ぶこともできません。そうすると子どもは、何とも退屈な一日を送るのです。

翌三日になると、また雰囲気が変わります。やが

て元の日常生活が戻ってくる、という予感がし始めるのです。年賀状は配達されますが、その量は減ります。また郵便屋さんには年賀状を届けてくれる特別な人ではなく、仕事で郵便物を扱うだけの普通の人へと戻ってしまうようです。幼心にも、楽しい特別な時間が長く続くことを祈りたいような気持ちになったものです。

しかし近年は、正月の三が日もだいたいお様変わりしました。コンビニエンスストアは年中無休ですし、いつのころからか、年賀状は一月二日にも配達されるようになりました。宅配便も年末年始に関係なく届けられます。正月の元旦といえども、一年に三百六十五ある、日々の中の一日分でしなくなりつつあります。

民俗学には、「ハレ」と「ケ」という考え方があ  
るそうです。ハレ（晴）が非日常的な、改まった特

別な状況を指すのに対し、ケ（褻）は日常的な普通の生活・状況を指します。ハレの日には特別な服を着て（晴着）、特別な食物を食べますが（たとえば赤飯など）、この意味で新年などの年中行事や七五三、結婚式などの通過儀礼は、ハレの日でした。

ハレとケの対比にはさまざまな意義があります  
が、その一つに時間という途切れのない流れの中  
で、ある種の区切りを付けることがあげられるで  
しょう。たとえば、現在年齢は誕生日ごとに満年齢  
で数えますが、かつては数え年で数えることが一般  
的でした。家族で新年を迎える瞬間は、人生という  
時間における一つの節目であり、親が子どもの成長  
を確認したり、子どもが自分の成長や肉親の老いを  
意識したりする契機となっていました。

また、正月のことを新春月と呼ぶことがあります  
が、この言葉には厳しい冬の寒さの中で春の到来を  
期待する気持ちが込められているようです。余談で

すが、かつてゲルマン民族の人々は、太陽の光が一年でも最も短くなる冬至の日に、ろうそくを樅もみの木の枝に立てて火をともし、光の復活を願ったそうです。

この習慣はやがてキリスト教と習合し、現在のクリスマスツリーへとつながります。あたたかい陽光が戻ってくることを希求する点で、新春という言葉やクリスマスツリーには、再生（あるいは復活）への願いが込められているようです。

このように、特別な日や状況を定めることにより、時間の流れに結節点（アクセント）が設けられ、一年や一生という時間の中にリズムが形成されていたわけです。

しかし、前述のとおり、現在ではハレとケの落差はなくなりつつあります。コンビニエンスストアやファストフード店では、一年を通じて同じような食べ物と同じような値段で売られ、レジャー施設では、

年間を通して趣向を凝らしたお祭りが毎日催されています。一年を通してさまざまな服飾を楽しむ人にとっては、新年の晴着といえど、日常的なコスプレの一環でしかないでしょう。こうした事態は、ハレとケの不分明化ともいえるでしょうし、あるいは、ハレの日常化ともいえます。ハレの日でなければおしゃれができず、またおいしいものが食べられなかったというかつての状況に比べるならば、現在の日本は便利で豊かになったのでしょうか。

こうした状況の背景には、昨今指摘されるようになった、いわゆる情報技術革命があります。これは人々の生活をいや応なく変質させています。もちろん、ハレとケの溶解は、大量生産・大量消費という世相の到来と共に起きたことであり、昨今に始まったことではありません。ただし、大量生産・大量消費を可能にした工業化の時代においては、モノとモノの交換に価値が置かれていたのに対し、現在の情

報化の時代においては、情報という、コトとコトの交換に価値が置かれている点で、時代状況が異なっています。もちろん、いつの時代も物と物の交換なくしては、人々の生活は成り立ちません。しかし、現代の取引においては、物の生産方法や物の交換というよりは、生産や交換という行為をいつ、どこで、どのようなやり方で、誰が行うかに人々の関心が向けられているようです。インターネットを介した通信販売において、人々は商品の現物に触れることのないままそれを購入し、電子決済によって支払いを行うことが一般的ですが、もはやそうした取引のあり方に誰も疑問を抱かなくなりました。

こうした状況は、子どもの成長や子育てとも無関係ではあり得ません。子どもの幼稚園・学校などを選ぶ際、インターネットは情報収集の道具となりま

す。また、情報技術は子どもの安全対策にも用いられます。たとえば、ICカードを持った子どもが駅の改

札を通過したり学校の校舎に入ったりと、そのことが電子メールで親に通知されるというサービスが既に実用化しています。また、子どもや高齢者の居場所を、携帯電話やGPS機能付発信機によって把握するというサービスも既にあります。さらに遊びにおいて、親と子は手を用いて自然と触れ合ったり玩具で遊んだりすることもできますが、屋内でネットゲームやテレビゲームに興じることもできます。人と物を情報として扱い、結び付けていく技術は、「ユビキタス」というかけ声のもとでさらに発展をとげ、今の子どもたちが大人になるころ、世の中は現在よりもさらに「便利」になることでしょう。

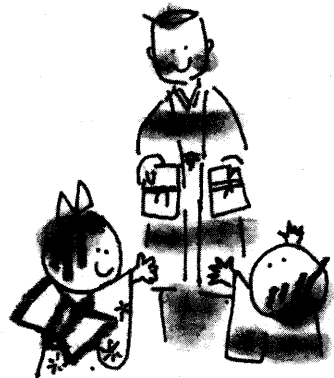
ただし、先に述べたとおり、このような状況においてはハレとケ、聖と俗といった対比が成立しづらくなります。これらの対比は、見方を変えると、人為的に時間や空間を歪めようとする努力といえるか

もれません。すなわち、ある種の価値付けによって、時間や空間を不均一にし、特別な「場」をつくりだすという試みです。ところが、技術の発展によって人々の生活に絶えず情報が侵入し、人や物を情報（コト）として結び付けるようになった結果、人には常に一樣な時間と空間の中に居ることが求められています。たとえ神社や教会で祈りを捧げている最中であつても、懐中の携帯電話はさまざまな電気信号を受信し続け、そして返信を要求し続けることでしょう。

このような状況では、ハレやケ、聖と俗といった時の流れを刻むアクセントは不明瞭になり、年中行事や通過儀礼がつくりだす生の営みのリズムは不規則になりがちです。そうすると、ただ単調で均質の日常性―聖俗や、ハレとケといった振幅・ゆらぎを失った―だけが続くこととなります。情報技術に裏打ちされた「終わらなき日常」は、さらに際限なく

大人や子どもたちをその網の目の中に絡め取っていくことでしょう。

されど、技術の発展は人々の成長に寄与するとは限りませんし、また幸福を常に約束するとも限りません。むしろ、成長や幸福感というものは、そうした利便性とは別の場に根ざしているようです。新年―クリスマスにせよ、正月にせよ―という年中行事



を例に取ると、コンビニエンスストアや百貨店で出来る合いの季節料理や菓子を買うことが、もし一般的だとするならば、家庭でわざわざそれを親子で調理することは、時間と労力の無駄かもしれません。インターネットを利用して宅配便を手配したり、予約金口座に送金したりすることを便利と呼ぶとするならば、わざわざ顔を合わせて子どもにプレゼントやお年玉を手渡すことは不便です。新年のあいさつを「あけおめ、ことよろ」という電子メールの符丁で済ますことが標準になるならば、年賀状を送ったり、相手宅まであいさつに出向いたりするのは野暮というものでしょう。されど、こうした一見無駄で不便で野暮なことを抜きにしてしまうと、大人も子どもも学びの機会や、来し方行く末を振り返ったり思索したりする機会を失うのです。ひいては、己の生の営みを結び直し、そこから新たな気持ちで人生の歩を踏み出す契機を失うことになります。

今の子どもたちは、将来どのような新年を迎えるのでしょうか。親や家族が家にいないクリスマスや正月を子ども時代に過ごす人もいるでしょうし、大人になったとき、年末年始に関係なく労働に従事する人も現れるでしょう。「便利」な世の中が維持されるには、それに見合う労力が要請されます。そうであるがゆえに、みんなのできるだけ（各自可能な範囲において）無駄で不便で野暮なことに勤しむこともまた重要なのではないのでしょうか。

筆者には、もはや子どもの気持ちはわかりませんが、かつて子どもだった者の一人としては、一年のうちせめて一日ぐらい、子どもが無為をかこつ日があってもよいように思えるのです。

（お茶の水女子大学大学院准教授。専門は比較文化論／生活造形論。著書として『バーナード・リーチの

生涯と芸術』ミネルヴァ書房、二〇〇六年など）